

自閉症児キャンプの問題点

—過去の実施過程から—

○高垣正道（ユマニティ） 高橋和敏（余暇問題研究所）

キーワード：自閉症、自閉症児、キャンプ

はじめに

自閉症 (autism) は、1943年カナー (Leo kanner—アメリカの児童精神医学者) が、早期幼児自閉症の概念を提唱して以来、世界中で多くの医師、心理学者、教師などによって、その治療と研究が続けられてきた。

自閉症の概念については、現在ほぼ統一され、周囲の人々との認知と感情的コミュニケーション障害、言語発達障害、知的発達障害、周囲の状態を一定に保つ強い欲求とそれを妨げられた時に強い抵抗を示すことなどが、主な特徴として挙げられる。

また、自閉症は生涯にわたる発達障害であり、さまざまな障害の中でも、もっとも困難の多い障害であると同時に、乳幼児期（現在では2歳半ごろ）の正確な診断から、一貫した治療や教育を一人一人に合わせて行うことによって、地域での社会生活が可能になることも分かってきた。

近年、特にノーマライゼーションの概念が台頭し、福祉の在り方も物品や施設の援助から、共に生きるという共生に変わりつつある観点からみて、1,000人に一人の割合で生まれてくる自閉症児の余暇活動へのアプローチは、今後ますます重要になってくるものと考えられる。しかしながら、今日まで自閉症の原因や療育の研究に主眼がおかれ、自閉症児・者への社会活動や余暇活動からの報告や研究事例は数少ない。

一方、自閉症に対するさまざまな誤解や偏見も、依然として存在する。それによって、彼らの社会生活や余暇活動の機会をせばめている現実がある。したがって、彼等を取り巻く環境は、決して居心地のよい社会とはいえない。いかに自閉症という障害を理解し、地域社会で共生できるか、その接点を真剣に探ることも、今後の重要課題のひとつとして認識されなければならない。

本報告は、以上のような視点から、1990年から実施してきた自閉症児に対するキャンプに着目し、その実施の過程や経験からその問題点を摘出し、今後の方向性を探ることを目的とした。

自閉症児キャンプの概要

1. キャンプ実施までの経緯

1979年、小児療育センター（神奈川県児童医療福祉財団）との協力により、自閉症児の療育のひとつの場面として「でんでん虫教室」と呼称し、週1回60分の運動機会を設け、自閉症児19名でスタートした。

1984年、軽度でコミュニケーションのとれる自閉症児の親からの要望を受け、そのA君を健常児のキャンプに参加させた。以来1989年まで、自閉症児の参加数が増加してきたため、翌1990年より自閉症児キャンプを発足させた。

2. 参加対象

- ・横浜市内「でんでん虫教室」参加児童・・・180名（6会場）
- ・横浜市内の訓練会等・・・・約150名

3. キャンプの種類

期間	学齢	キャンプ受入れ目安
・1泊2日	幼稚園年長児から	食事・排泄がほぼ自立している
・2泊3日	小学生から	食事・排泄・衣類の着替えがほぼ自立している
・3泊4日	小学生から	グループ行動ができて、コミュニケーションがおおむねとれる

4. キャンプのねらい（強調点）

- 1) 自閉症児に対してバラエティに富んだ余暇活動（とくに自然活動）を提供し、彼等の生活経験を豊かにさせること。
- 2) 共同生活体験やグループ活動を通して、社会性や社会適応能力を向上させる機会を提供すること。
- 3) 親元を離れての生活体験やグループ活動を行うことにより、自立への足がかり・機会を提供すること。

5. プログラム概要

- ・夏季キャンプ ・野外炊飯・ハイキング・川遊び・サイクリング・キャンプファイヤー・クラフト・歌・ゲーム・アスレチック・日記・マスつかみ
- ・スキーキャンプ ・スキー・ソリ遊び・雪遊び・歌・ゲーム

6. 指導者とその参加者との割合

- ・1泊・・・参加者2名に対して1名の指導者
- ・2泊・・・参加者3～4名に対して1名の指導者
- ・3泊・・・参加者6～8名に対して1名の指導者
- ・スキーキャンプ・・・参加者2～3名に対して1名の指導者

7. 過去の参加者数

実施年 参加人数	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996
1泊2日	52	23	30	32	33	22	13
2泊3日		36	45	40	45	43	39
3泊4日	42(42)	76(36)	64(32)	73(48)	43(43)	55(55)	56(56)
計	94	135	139	145	121	120	108

* 3泊4日の（ ）内数字はスキーキャンプ

8. キャンプ効果

1990年からのキャンプ実施にみられる主な効果は次のように要約される。

継続して参加している多くの子どもたちは、

- ・夏休みのプログラムとして定着し、毎年の参加を楽しみにしている。
- ・各プログラムへ自ら参加意思を示して参加する。
- ・前年の経験を生かした活動が可能になる。
- ・年を追う毎にグループ活動がスムーズに実施できる。

実施上の主な課題点

1. アセスメントの段階

健常児のキャンプにおいても、事前の情報収集は欠くことのできない重要事項であるが、自閉症児におけるキャンプでは、個々のもつ特徴把握にはきわめて綿密なアセスメントが必要となる。現在まで、親に対する事前アンケート、面接および「でんでん虫教室」参加児には、教室担当指導者による観察結果報告などを行っている。また事前アンケートについては、その項目をできるだけ細分化し、的確な情報を得ようとしている。それに伴って、現実には情報収集項目の種類と、それに伴う量の増大と期間の増大を招く結果となる。これらは、担当者にとって通常以上の緻密さが要求され、また整理にかかる仕事上の負担も莫大となることが多い。

2. 運営の段階

自閉症児のキャンプ運営において、さらに留意しなければならない特徴には、下記のような事項がある。

- ・未知の場所、事柄に敏感である・・・周囲の状態を一定に保つ強い欲求があり、その状態が妨げられると強い抵抗を示すという特徴によって、新しい事柄や未知の場所での体験に対してきわめて敏感に反応し、ときにはパニック状態となりやすい。
- ・行動に対する不安・・・空白の時間があつたり、次の行動が不明な場合、落ち着きがなくなり、パニックにつながることが多い。視聴覚を十分活用し、事前の理解を徹底することが必要になる。
- ・ホームシック・・・キャンプスケジュールがよく理解されていないと、健常者よりもホームシックになりやすい傾向がみられる。2泊あたりから「いつ帰る」「横浜帰る」などの言葉が出始める。事あるごとに、「今日は何日で帰る日は何日?」「あといくつ寝たら帰るのかな?」と本人に確認しないと落ち着かなくなることが多い。
- ・テリトリー意識・・・自分の持ち物や自分の居場所を明確にしないと、混乱する傾向がみられる。生活の流れを理解し、行動をスムーズにするために、履物、着替え、荷物、タオル、歯ブラシ、ベットなどを、細かく本人に明示することが重要となる。
- ・器物へのこだわりや興味・・・特定の物へのこだわりや興味に対して、それに目が向くと他の事柄が見えなくなったり、他の活動には見向きもしなくなる傾向がある。(火災報知器、鳥のはく製、メガネ、スッテカーなど)

以上主な傾向を挙げたが、このような状況に、さらに個人差が加わる。したがって、その状況回避に注意が注がれ過ぎると、本来実施したいプログラムがおろそかになり、管理することに終始することになってしまう。

3. 親の要望とのギャップ

自閉症児をもつ親は、子どもに対して、キャンプにおいてさまざまな経験をさせたいという要望が強くある。とくに社会性を身につけさせ、社会適応能力を高めさせたい気持ちは、健常者の親よりも強い。

キャンプにおいてキャンパーに社会性を高めさせるには、共同生活行為におけるキャンパー間の相互作用を重要視することと共に、活動プログラムにおいてもグループ活動を多く展開することが必要と考えられる。しかしながら、自閉症児がもつ個々それぞれの症状を考えると、グループ活動展開がおのずから限定されてくるきらいがある。また毎年実施してくると、プログラムのマンネリ化にもなりかねない。またプログラムを多彩にするためには、より多くの指導者や施設の多様化が求められる。その結果、キャンプへの参加費用の高騰を招くことにもなる。

このように、親の要望にどこまで対応できるか、また親の要望と現実のギャップをいかに少なくしていくかが、現状の問題でもあり、今後の課題でもある。

4. 施設

自閉症児・者に対する理解の少ない施設では、事前に障害の状況を説明し、理解を求めて実施している。しかしながら、見た目には具体的な障害の程度が分からないため、意外な行動がみられるための対応に苦慮し、敬遠される傾向がある。またこのような施設では1～2回の利用後は断られるのが通例となっている。

公共施設においては、夏季期間は抽選利用となるので、スケジュールが立てにくく、他の利用可能施設についても数に限りがある。

5. 指導者

- ・自閉症というさまざまな特徴をもち合わせた症状は、机上の講義や数回の経験では理解が困難であり、その養成・訓練に、長期間を要する。
- ・したがって、その指導者の養成には、単一民間組織のみでは限界がある。
- ・通常キャンプよりは、指導者・スタッフ数の割合が多くなり、かつその特殊性を理解した指導者確保が困難となっている。

まとめ

以上、自閉症児キャンプ実施の概要と、それに伴う問題点を挙げてきたが、これらの問題点のみには止まらないところに、自閉症児キャンプの特殊性があるように感じられる。このキャンプ実施を通してまず総合的に感じることは、現状における自閉症児・者へのさまざまな偏見や誤解を取り除くには、地域社会において、その正しい理解と協力から始まるということである。それによって、彼等の自立を促進させ、自らの余暇活動の場面を獲得し、余暇時間も生み出すことへと発展していくであろう。そのためには、多様化するニーズの把握やプログラムの工夫、指導者の育成、そして単一民間組織の活動にとどまらず、行政や関係組織への働きかけが、一体となって展開していくことも必要と感じる。